

日本オーステイン協会第 10 回大会プログラム

- 日 時: 2016(平成 28)年 6 月 25 日(土) 受付: 午前 10 時より
- 場 所: 東京女子大学 9 号館 1 階 9102 教室
(東京都杉並区善福寺 2-6-1)
※JR「西荻窪」駅(JR 中央線、JR 総武線、東京メトロ東西線乗り入れ)下車、北口より徒歩約 12 分
※大学ホームページ(<http://office.twcu.ac.jp/univ/access/>)ご参照のこと
- 参加費: 日本オーステイン協会会員: 無料
当日会員(上記会員以外): 一般 1,000 円、学生 500 円(当日受付で支払い)

◆開会の辞(10:25~10:30) 塩谷 清人(日本オーステイン協会会長・学習院大学名誉教授)

◆ワークショップ(10:30~12:00)

テーマ: 「Cambridge 版全集の Introduction を読む」

司 会: 三馬 志伸(玉川大学教授)

講 師: 真下 美和(好文学園女子高等学校非常勤講師)

岡本 由恵(安田女子大学助教)

白木 玲子(金城学院大学非常勤講師)

◆総会(13:00~13:30)

◆研究発表(13:40~15:00)

研究発表 1 13:40~14:20

司 会: 高桑 晴子(お茶の水女子大学准教授)

発表者: 伊藤 優子(学習院大学非常勤講師)

「18 世紀イギリス小説と演劇の諸相」

研究発表 2 14:20~15:00

司 会: 坂田 薫子(日本女子大学教授)

発表者: 大木 ひろみ(中京大学非常勤講師)

「次男にして牧師? —『ノーサンガー・アベイ』の聖職者を中心に」

◆シンポジウム(15:15~17:15)

テーマ: 「オーステイン研究のこれまで、そして、これから」

司 会: 富山 太佳夫(青山学院大学名誉教授)

講 師: 海老根 宏(東京大学名誉教授)

深澤 俊(中央大学名誉教授)

塩谷 清人(学習院大学名誉教授)

◆閉会の辞(17:15~17:20)

◆懇親会(18:00~20:00)

場 所: こけし屋 別館(JR 西荻窪駅、南口駅前)

Tel: (03) 3334-5111 <http://www.kokeshiya.com/>

会 費: 5,000 円

問合せ先: 日本オーステイン協会事務局

〒245-8650 横浜市泉区緑園 4-5-3 フェリス女学院大学文学部英文学科 向井秀忠研究室内

Tel: (045) 812-9064 [研究室直通] E-mail: mukai@ferris.ac.jp

日本オースティン協会第 10 回大会発表レジュメ

【ワークショップ】

Cambridge 版全集の Introduction を読む

司会 三馬 志伸(玉川大学教授)

講師 真下 美和(好文学園女子高等学校非常勤講師)

講師 岡本 由恵(安田女子大学助教)

講師 白木 玲子(金城学院大学非常勤講師)

2005 年から 2008 年にかけて刊行された The Cambridge Edition of the Works of Jane Austen は、しっかりとした本文校訂に加えて詳細な註釈や情報満載の補遺も付され、20 世紀前半から長らくオースティンの小説の定本として君臨してきた R. W. Chapman 編のオックスフォード版に代わり、オースティン作品の新たな決定版テキストとなった。そして、このケンブリッジ版のもう一つの特徴は、各巻に編者による重厚な Introduction が付されている点で、その長さは、短いものでも 40 ページはあり、長いものは 60 ページを超えている。執筆や出版の経緯や受容史、批評史などが包括的に扱われたこれらの Introduction は、どの巻も、オースティン研究を志す者にとっては必読の内容といえるだろう。

関西の若手研究者を中心とした Jane Austen Study Group では、2009 年から 2012 年にかけて、各作品の Introduction を検討する勉強会を開いてきたが、今回のワークショップでは、*Sense and Sensibility*, *Pride and Prejudice*, *Emma* の 3 作を取り上げ、それぞれの Introduction の内容を紹介したいと考えている。この 3 作品の Introduction は、前述の基礎研究的な事柄に加え、それぞれの作品について編者独自の示唆に富む見解が披露され、特に読み応えのある内容になっているので、その点を中心に各発表者に報告してもらう予定である。

【研究発表】

18 世紀イギリス小説と演劇の諸相

伊藤 優子(学習院大学非常勤講師)

ジェイン・オースティン初期の作品『ノーサンガー・アビー』(1798-99 年執筆、1818 年出版)には執筆と同時代のゴシック小説が数多く登場する。主人公キャサリンはバースで出会った友人イザベラから次の小説を読むよう勧められる。『ヴォルフエンバッハ城』、『クレアモント』、『謎の警告』、『真夜中の鐘』、『ライン河の孤児』に『黒い森の魔術師』、そして『恐ろしき謎』—これらはオースティンによる創作ではなく、最後の 2 作品がドイツ語原作の英訳ということのぞけばいずれも元は英語で発表され実在した作品であり、今日ではノーサンガー・セットとして広く知られている。このセットに加えて、イザベラの兄ジョンは小説を読まないというそぶきながらもマシュー・グレゴリー・ルイスの『修道士』を挙げる。キャサリンはアン・ラドクリフの『ユードルフォの謎』とティルニー家の邸宅を重ねあわせたがゆえの非礼をヘンリーからたしなめられる。

18 世紀後半から 19 世紀初頭にかけて、ゴシック小説のみならず今日ゴシック演劇とよばれる一連の演劇作品が登場した。ゴシック文学に先鞭をつけたホレス・ウォルポールの小説『オトランドの城』(1764 年)は、ロバート・ジェフソンにより『ナルボンヌ伯爵』(1781 年)と題してコヴェント・ガーデン劇場で上演された。これはウォルポールの私設印刷所で印刷された戯曲『謎の母』(1768 年)をふまえてのことである。『オトランドの城』出版と同年に誕生したラドクリフは、『アスリン城とダンペイン城』(1789 年)の出版を皮切りに、1790 年代に入りますます創作意欲盛んに『シチリアのロマンス』(1790 年)、『森のロマンス』(1791 年)、『ユードルフォの城』(1794 年)を発表した。ルイスの『修道士』を受けて執筆した『イタリア人』(1797 年)が生前に出版された最後の作品となった。一方でルイスは、オースティンと同様ラドクリフの『ユードルフォの謎』に触発されて『修道士』を執筆し加筆修正をいとわず版を重ね、ドイツ語作品の翻訳を手がけたほか、ドルーリー・レイン劇場での『古城の亡霊』(1797 年)連続上演でめざましい興行収入をあげた。チャールズ・ロバート・マチュアーもまた、同劇場での『パトラム』(1816 年)上演で大成功をおさめたが、ゴシック小説の集大成『放浪者メルモス』(1820 年)を発表した晩年は不遇であった。

ゴシック小説で成功した作家のほとんどが劇場にも活躍の場を求めたが、ルイスやマチュリーンのように小説家というよりもむしろ劇作家として人気を博した事例はきわめて稀であり、ゴシック演劇の大部分はゴシック小説からの翻案作品であった。ラドクリフは、人前に出るのをはばかり執筆期間もごく短いものであったが、当時最も高い評価を得ており、死後出版された遺作『ガストン・ド・ブロンドヴィル』(1826年)までのすべての作品が戯曲化された。マイルズ・ピーター・アンドリュースにより『城の謎』(1795年)、ジェームズ・ボーデンにより『ファウンテンヴィルの森』(1794年)と『イタリアの修道士』(1797年)、ヘンリー・シドンズにより『シチリアのロマンス』(1794年)がそれぞれコヴェント・ガーデン劇場とハイマーケット劇場で上演された。

本発表では、『城の謎』を中心にアンドリュースとボーデンの劇作術を対照し、ラドクリフが『ユードルフォの謎』で描きだしたゴシック空間がどのように舞台上に構築されたのかを読み解き、同時代の読者と観客の想像力、ひいてはオースティンの空間描写に及ぼした影響を考察したい。

次男にして牧師？——『ノーサンガー・アベイ』の聖職者を中心に

大木 ひろみ(中京大学非常勤講師)

この作品は「キャサリン・モーランドを子供時代に見かけたことのある人なら、誰も彼女がヒロインになるために生まれた人だなどとは思わなかっただろう」という書き出しで始まるが、このヒロインとはシャーロット・スミスの『エメリン』のヒロインを念頭に置いていたとされている。ロマンスのヒロインと正反対で、器量も良くなく、才媛でもなく、平凡な身の上(両親も大勢の兄弟も皆健在で、読者の同情を引くようなものは皆無)であるキャサリンは「反ヒロイン」的な人物として提示される。当時流行っていたロマンスのパロディーであることは明白であり、物語の始まり(特にバースへたどり着くまでの経緯)は、ことごとくロマンスのお決まりとは正反対になっている。

しかし後半のノーサンガー・アベイに舞台を移すと、ヘンリーに「あなたには『本で読む通りの』家につきものの恐怖に出会う覚悟がありますか？」と焚き付けられ、キャサリンは好奇心を掻き立てられ、近代的な屋敷を目にしても、まるでロマンスを読みふけり時代錯誤な妄想にとりつかれた『女キホーテ』のアラベラのように、ティルニー将軍が妻を殺害した又は幽閉しているなどのゴシック・ロマンス的な妄想にふけるようになる。

ノーサンガー・アベイは古びた陰鬱な屋敷ではなく、ティルニー将軍によっていたるところに「改良」の手が入った近代的な屋敷(おそらくオースティンの他の作品に出てくるどのカントリー・ハウスよりも近代的)であり、ゴシック・ロマンスのパロディーの舞台としては打って付けである。大規模な菜園には「ずらっと温室が並び」、台所も「料理人の労働を軽減するあらゆる近代的な工夫」が導入され、ティルニー将軍はやり手の領主である。

しかし家事専用の新しい建物は「建築上の統一性が必要と思われていなかった」というように「改良」の行き過ぎが批判的に描かれている。これは「これほど自然の美が無粋な趣味で壊されていないところを見たことがなかった」と描写されるペンバレーや「目にも心にも美しい」「イングランドの翠緑、イングランドの文化、イングランドの快適さ」と描写されたドンウェル・アベイとは対照的である。

エリザベスはペンバレーの領主ダーシーとエマはドンウェル・アベイの領主ナイトリーと結ばれるが、ロマンスのヒロインのパロディーのようなキャサリン(牧師の娘)はノーサンガー・アベイの跡取り息子ではなく、次男で牧師のヘンリーと結婚することになる。ここにオースティンはどのような意図を込めているのだろうか。

オースティンの6つの主要作品の内、ヒロインが牧師と結婚する作品は3つある。『分別と多感』のエドワード(元々は長男であったが、母親に勘当され、財産相続権を失ったため聖職に就くことにした)以外は、『ノーサンガー・アベイ』のヘンリーと『マンスフィールド・パーク』のエドモンドがヒロインの結婚相手となる。ヘンリーとエドモンドは共に領主の次男で、父親から聖職禄を与えられて領地内にある牧師館の牧師となる。父親はそれぞれ立派なカントリー・ハウスの領主であり、厳しい家長として屋敷や領地を治めているが、実はそれぞれに道徳的な問題を抱えており、見かけほど立派な紳士とは言えない。例えばティルニー将軍は、誤った情報からキャサリンを次男の結婚相手にもってこいだと考え屋敷に招待したが、彼女に大した財産がないと知るやいなや彼女を屋敷から放り出し、お伴も付けずに自宅まで長旅をさせる。また長男もそれぞれ父親以上に道徳的に問題があり、跡取りとして大変心もとない。さらにヘンリーにはエリナーという妹があり、エドモンドにはマライアとジュリアという妹がいる。エリナーには「本物の優雅さ」と「育ちの良さ」があり、キャサリンの腹心の友となるが、財産も爵位もない男性と密かに恋人関係にあった。物語の最後に運よく彼が子爵の称号と財産を受け継ぐことになったため、めでたく結婚できたが、一歩間違えばジュリアのように駆け落ちをする羽目になっていたかもしれない。このように自分以外の家族が道徳的な問題を抱えているヘンリーとエドモンドには共通点が多い。

ただし『ノーサンガー・アベイ』は1798~1799年に書かれた(1802年か1803年頃に手が加えられた)のに対し、『マンスフィールド・

パーク』は 1811~1813 年頃に書かれており、約十年の時間差がある。その間の時代の変化が二人の人物像に違いをもたらしているとも考えられる。オースティンが生きた時代は産業革命やフランス革命の影響、さらには急進主義などの変化と革新の傾向が現れてくる一方で、産業革命以前からの制度・生活・習慣がそのまま保たれている部分もあり、「変わるもの」と「継続するもの」が競合し共存する複合的な社会であった。宗教においてもメソジスト信仰復興そして福音主義の信仰復興があり、産業革命によって引き起こされた社会の変化で形骸化していた教会は、十八世紀におこった国教会内部の信仰回復運動によって刷新され、十九世紀になると最も活発な国教会内部の勢力は福音主義の聖職者になった。オースティンは作品の中で、自分の宗教的な立場をはっきりと表明することには慎重であったようだが、教会をめぐる変化には敏感であり、それはヘンリーとエドモンドの描かれ方にも反映されていると考えられる。『ノーサンガー・アベイ』はゴシック・ロマンスのパロディーの体裁を取っているが、オースティンはそこにイギリスの当時の社会情勢を巧みに描き込んでいる。彼女の家族が深く関わっていた聖職・牧師という職業に就いたヘンリーの人物像を分析することで、彼女の宗教的・道徳的なメッセージを読み解きたい。

【シンポジウム】

オースティン研究のこれまで、そして、これから

司会 富山 太佳夫（青山学院大学名誉教授）

講師 海老根 宏（東京大学名誉教授）

講師 深澤 俊（中央大学名誉教授）

講師 塩谷 清人（学習院大学名誉教授）

ヴァージニア・ウルフが指摘しているようにオースティンの偉大さを指摘することは難題である。これまでのオースティン研究はその難題にさまざまな方向から取り組んできた。しかし、オースティン研究は、ジグソーパズルにたとえれば、かなりのピースを適所に置いたがまだまだ未完成といえる。しかもこのジグソーパズルは時代と共に微妙に変化していく。このシンポジウムでは、深澤と塩谷はその時代思潮、文化、社会、つまりコンテクストを中心とした研究を、海老根は現在の研究をそれぞれ視野に入れ、オースティンの偉大さの一片を語り、できれば将来の研究の可能性に言及する。

深澤 俊

Comedy of manners の系譜での Austen の創作態度と、それが後期に変化するのではないかということを Woolf の印象 less of facts and more of feelings と結びつけて考えてみます。

海老根 宏

1. オースティンについて語ることの難しさ（小池滋さんの Calamity Jane についての『英語青年』での論文をマクラに）
2. したがってオースティンを論ずるには「オースティンの内容」でなく、「オースティンがいかに読まれてきたか」を見ることが有益であろうこと（ブロンテ研究における Brontë Transformations のテーマに関連付けて）
3. 日本ではオースティンはいかに読まれてきたか（漱石、野上彌生子、山本健吉、倉橋由美子）

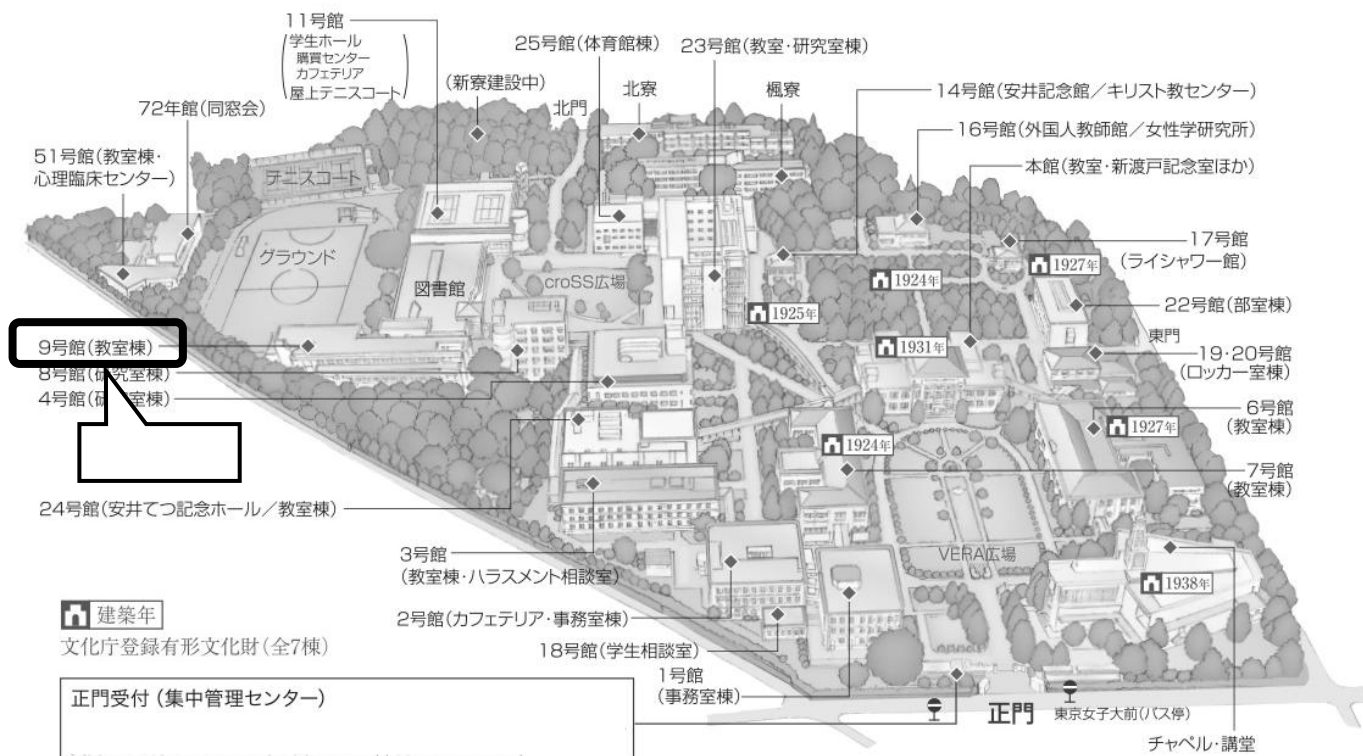
塩谷 清人

オースティンほど先行作品の影響を受けている作家もいないであろう。そこでまずそれら先行作品とオースティン作品の類似性を示し、次に模倣作家オースティンがそのような影響から脱していかに独自の世界を創造しているかを示す。具体的には、彼女の小説に見える社会的、文化的 milieu の決定的変化、個人（私）と社会（公）の緊張関係などである。

【交通アクセス】

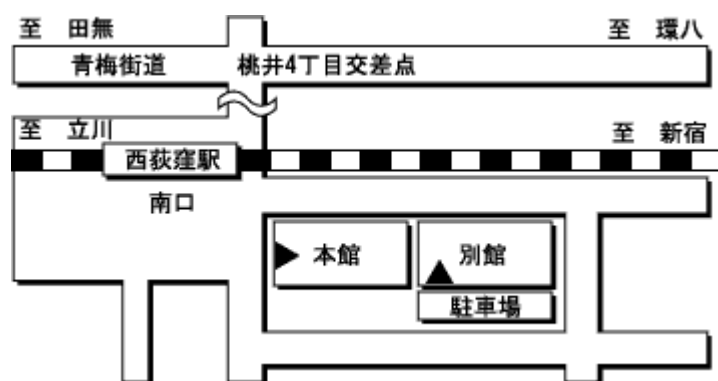


【キャンパスマップ】



※入校時は正門守衛室に日本オースティン協会大会出席の旨をお伝えください。

【懇親会会場＜こけし屋＞アクセス】



※会場は別館となります。